

「糍（しいな）は出ていけ、実は残れ」



孫の一歳のお祝いを娘婿の実家のある長野県で行いました。愛知県に住む私には、馴染みのない風習を伴った行事でした。長野県は色々な風習が色濃く残る地域で、その一つが子どもが一歳になった時のお祝いに風呂敷やリュックに「一升餅」（約二キ）を入れて子どもに背負わせる風習です。「一升餅」の名には、「一升」と「一生」が掛け合わされていて、「一生食べ物には困らないように」「これからの人生が円満で健やかであるように」との願いを込められています。昔は医療が十分ではなく生まれてから一歳になるまで、小さい子どもが無事に育つことが大変だったため一歳の誕生日だけは特別な思いがあったのです。

また、長野県では、一升餅の他に農業で穀物の選別に使う「箕（み）」と呼ばれる農具に子どもを乗せて「糍は出ていけ、実は残れ」と言いながら箕を揺らすということを行います。「糍」とは中身の無い粃殻（もみがら）のことで、子どもの中の粃殻のような粗悪な部分は飛ばして、本当に良いところだけが残り、丈夫で健やかに育ってほしいという願いから行われる農村文化の一つです。

こういった地方に伝わる子どもの成長を願うお祝いの行事は、人間のとても純粋な感情から生まれたものですが、改めて仏教の視点から考えてみると私たち人間の願いというものには、欲望や理想といった、実に自己中心的な心から出発しています。それ故に、時として私たちは個人の幸せを願い求めるあまり自分自身や他者を犠牲にしたりして傷つけ合うことも多々あります。そして、私たちの願いは、思いどおりには決してならないことを誰しもどこかで気づいています。気づいているのにそれを求めてしまう、これは自分が自分の人生を引き受けられないということであり、人間にとって一番困ったことだと言えるのではないのでしょうか。

私が私でよかったといえる人間にしてやりたいというのが、仏様からの願い（本願）だと教えられます。孫を持つ身とさせていただいて、初めて亡き父が発していた「孫は目に入れても痛くないなあ」という気持ちを実感しました。尊い“いのち”を賜ったが故に、孫にはどのような人生でもわが身を引き受ける力と勇気をもってほしいと愛知のジージは願っています。

稲沢市・善慶寺住職 住田昭信